

序

三月十一日、テレビは巨大な津波にのみ込まれていく海岸の町を映し出しました。その破壊の凄まじさと、失われたたぐさんの命とそこにあつた生活、自然を思うと言葉を失います。

そこは宮沢賢治が歩いた場所でもあります。

賢治の生まれる二か月前の一八九六年六月十五日、三陸大津波は岩手県内で一万八一五八人の命を奪いました。また八月三十一日にも大地震が襲い、母イチは生後四日の賢治に覆いかぶさつて守つたといわれています。

また賢治の亡くなる六か月前の一九三三年三月の地震と津波は、岩手県で三〇〇〇人余の命を奪い、三月と四月の余震は一〇〇五回に及びました。

賢治の作品は、広大な宇宙や輝く野原を描いていても、そこに存在するものの悲しみを感ぜさせます。それは、原体験としての地震や津波が、自然への深い憧憬と同時に、畏怖をも感じさせていたことにもよるのではないのでしょうか。

それと同時に、作品には〈かなしい〉、〈さびしい〉という言葉も多く見られます。〈かな

しい)、〈さびしい〉という状況は、文学には大切な要素ですが、その状況を描きだすことが重要で、そのことへの心情を表す言葉〈かなしい〉〈さびしい〉は、表現上効果的でないと思われまゝ。否定的な見方をすれば、最初に書いた哀愁とともに、それは賢治の後ろ向き姿勢ではないか、という疑問を持ち、〈かなしみ〉、〈かなしい〉、〈かなしむ〉とその活用形、〈さびしむ〉、〈さびしらく〉、〈さびしむ〉とその活用形のすべてを拾って作品を読み、悲しみ、寂しさが賢治の内面、生き様とどう関わっているかを考えてきました。同時に賢治が表現方法としてこの言葉をどう使っていたかも考えました。

賢治はいつもぎりぎりまで自分の心を掴もうとしていて、それを表すための言葉が、〈かなしい〉、〈さびしい〉でした。情景への溢れるような感動や、大切なもの、畏敬するものへの思いを表すにも、本来〈かなしみ〉の持つ、広い意味を本能的に感じとって使ったのです。その結果、賢治は〈心象スケッチ〉という手法を生みだしました。〈心象スケッチ〉が捉えた〈かなしみ〉は、内面の修羅の心、最愛の妹との死別、周囲の農民を襲う天災による凶作など、人の力の及ばない事象でした。童話では、他の命を奪うことで維持されている命、社会の不条理など、これも不可避の悲しみを描きました。

津波の映像から賢治のことを思ったのは、この深く絶対的な喪失感と痛みと通じるものがあつたためかもしれません。

賢治の悲しみは、しばしば青で表現されます。

明治四十五年の短歌〈石投げなば雨ふるといいうみの面はあまりに青くかなしかりけり〉の青は、岩手山の火口湖の鮮やかな緑青で、その風景に心突かれる十六歳の姿を見ます。

大正十一年の詩、「春と修羅」〔春と修羅〕の〈かなしみは青々ふかく〉は、心に住む修羅を感じた悲しみですが、空や海の深い青色が感じられます。

また、大正十三年の「薙露青」〔春と修羅第二集〕の青は夕暮れ空の薄墨色を含んだ淡い青で、時を経て蘇る、失った妹への深い悲しみの色です。

それが濁りのない青であることは、賢治が、悲しみから眼をそらすことなく、一つの真理に到達していることを表すのではないのでしょうか。

賢治の描く悲しみ、寂しさは、喪失の思いと同時に、感動の表現でもあり、内なる理想も明らかにしています。

それは、死んだ妹への誓い「けっしてひとりをつてはいけない」という言葉となり、賢治自身の実践によって農業の未来を開くという行為となって現れます。

一九三二年成立の童話「グスコブドリの伝記」には、〈潮汐発電所〉が登場します。これは潮の干満を利用してタービンを回し発電するもので、一九二五年、フランスのランス発

電所で開発が始められ、一九六七年初めて実現しました。現在では自然利用の発電として世界で注目されています。賢治は、この時すでに津波のエネルギーを逆手にとって利用しようという強い理想を持っていたのではないのでしょうか。

賢治が作品で最も訴えたかったのは、人間の悲しみと、そこからの出発だったと思います。

二〇一一年三月

小林俊子

テキストは『新校本宮澤賢治全集』（筑摩書房）による。
年譜は堀尾青史『宮澤賢治年譜』（筑摩書房、一九九一年）による。

宮沢賢治 かなしみとさびしさ



第一章 詩歌

はじめに

賢治の作品には、かなしさ・かなしみ・かなしい・かなしむ（以下〈かなしみ〉と表記する）、さびしさ・さびしい・さびしむ（以下〈さびしさ〉と表記する）とその活用形が多いと感じる。

賢治に年代が比較的近く、影響も受けている北原白秋、萩原朔太郎の第一詩集と『春と修羅』を詩篇数に占める用例数の割合で、比べてみる。

北原白秋『邪宗門』（易風社、明治四十二年）では、総詩篇数一二〇、〈かなしみ〉二十二例、〈さびしさ〉一例、総数二十三例で、用例の出現率は五・二一七篇に一例、萩原朔太郎『月に吠える』（白日社出版部、感情詩社、一九三一年）では、総詩篇数五十五、〈かなしみ〉十一例、〈さびしさ〉二十五例、総計三十六例、で一・五二七篇に一例であるのに対し、『春と修羅』は、総詩篇数七十九（『春と修羅』六十九篇・同補遺十篇）に対し、〈かなしみ〉三十二例、〈さびしさ〉二十四例で、一・四一〇篇に一例と、高い出現率を示している。

このような心情をあらわす言葉は、賢治の氣質が原因するなにか後ろ向き姿勢を感じさせ、また表現としてあまり効果的でないといわれているが、賢治はなぜ多用しているのだろうか。

〈かなしい〉、〈さびしい〉は情意形容詞として、一人称主体の感情を主に表現する言葉である。と同時に、そのような感情を起させる事物の形容としても用いる。またより客観的に、ある対象についての印象の形容にも用いる。

『日本国語大辞典』第二版（小学館）で、〈さびしい〉は、本来ある状態に無く、また本来備わっているはずのものが欠けていて、満たされない気持ちを表す、人の気配が無く心細い、などの意とあり、書き手の感情のほかに、対象の状況をもあらわすことが出来る。一方、〈かなしい〉の意として、1 死、別離など人の願いにそむくような事態に直面して心が強く痛む。2 男女、親子などの間の切ない愛情を表す、3 関心や興味をそそられて、感興を催す、4 みごとだ、あつぱれだ。5 他から受けた仕打ちがひどく心に答える様、6 貧苦が身にこたえる様貧しくてつらい、とあり、現在ではおもに1の意で使われる。

阪倉篤義は〈かなし〉の語源には、〈兼ね〉（あわせもつ）が考えられるという。自分とは別の対象を「兼ねてしまいたい」というほどの〈いとおしさ〉——〈愛し〉である。これは同時に現実には〈兼ねること〉のできない空虚感をいだいっていることであり、この孤独感が〈かなし〉の意味となったとする。

大野晋は、〈かなし〉が「……しかねる」という不可能を表す語から、力及ばずどうしようもない切なさを表すということであるとす。

本居宣長は、同様の心の動きを〈あはれ〉とし、そのなかの〈かなしき事〉、〈こひしき事〉の感動が深かったために、一般には悲哀のみが、〈あはれ〉として定着したという。

また、それは、漢字で言葉を表記するようになったとき、伝えられた漢字が SORROW、GRIEF の意の悲・哀・怖・恨のみであったことも一因である。柳田國男は、カナシ、カナシムは単に感動のもつとも切なる場合を表す言葉で、必ずしも悲や哀のような不幸な刺激には限られなかったが、人生にはその悲しみが比較的多くあったことに加えて、中世以降この漢字が仏教文学や説教に多く使われたためという。

はじめに

人間にとつて最大の悲しみは、自分自身をも含めて、大切なものが失われていくことであり、人間の存在の問題ともつながっていく。さらに浄土教信仰では、「悲」は他者への思い、仏の「大慈悲」へとつながり、人が神や仏につながっていく。⁽⁷⁾

一方、人は悲しみを古来作品に表現し続ける。

宣長は、⁽⁸⁾堪えがたい悲哀を、声に出して言い、さらにそれがあある形(文(あや))をそなえることによつて「歌」が発生したとして、〈あはれ〉が文学の発生の源となるとし、さらにそれを他者に受け止められることによつて救われるとした。

世阿弥は、謡曲「姥捨」、「砧」などにおいて、主体にその孤独ややるかたない想いを訴えさせ、それが観客に見られることによつて受け止められ、なおかつそれが「ことわり」——宇宙の秩序——のもとに表現されることによつて認められるものとなるとした。⁽⁷⁾

〈かなしみ〉、〈さびしさ〉に賢治の心情はどう形成されていたか、賢治はそれを表現することで何を得たのであろうか。この語によつて、その他にどのような表現を得たであろうか。また賢治はこの言葉を、ほとんど平仮名表記としている。この意味するものは何か。

〈かなしみ〉、〈さびしさ〉の表現上の意味を探ることで、賢治の思想形成に迫つてみたい。

〈かなしい〉・〈かなしむ〉・〈かなしみ〉・〈うらがなしい〉(以下総括しては〈かなしみ〉と表記)、〈さびしい〉・〈さびさく〉・〈さびしむ〉・〈うらさびしい〉・〈さみしい〉(以下総括しては〈さびしさ〉と表記)の全ての活用形を抽出した。

短歌は賢治の文学活動の始めである。用例数も多く〈かなしみ〉の出現するもの一〇二例、〈さびしさ〉の出現するもの七十三例である。賢治が初めて対象をとらえ表現しようとして、〈かなしみ〉〈さびしさ〉をいかに用いたかを考える。

詩作品は、発想の方法も、表現形態も短歌とは異なる。作品中での頻度を計る目安として、CD-ROM『宮澤賢治全詩集』(マイクログテックノロジー、一九九九年)に表示する全字数を概数とし、この概数で用例数を割つたものを掲げた(別表)。

〈かなしみ〉、〈さびしさ〉は、発想時期によつて、かたよつて現れる。特に際立つのが、「冬のスケッチ」で、八五五四字という短い中に〈かなしみ〉二十四例、〈さびしさ〉六例もみられる。その意味するものは何か。それは、『春と修羅』の時代へどう受け継がれていくか考える。

『春と修羅』・『春と修羅補遺』では賢治は〈心象スケッチ〉の方法を会得する。〈かなしみ〉〈さびしさ〉は、そこでいかなる表現方法としていさされるか、そしてその時代に遭遇した妹の死とそこからの脱却のかかわりについても考察する。

『春と修羅第二集』・『春と修羅第二集補遺』では、農学校の教師として農村とそこに生きる人々と初めて接した思いが、いかに表現されるか、そして農業の実践への転身がなされるなかで、この言葉がどんな意味をもつかを中心に検討する。

『春と修羅第三集』・『春と修羅第三集補遺』、『詩ノート』、『口語詩稿』『補遺詩篇I』では、激減する〈かなしみ〉〈さびしさ〉の代わりの表現と、農業の実践とのかかわりを考える。

『東京ノート』、『三原三部』、『疾中』では、一年間に体験した出発と挫折がどのように表されるかを見る。

「文語詩稿」、「補遺詩篇II」の時代には、文語詩の制作の段階で〈かなしみ〉〈さびしさ〉がいかにか推敲されていくか、その効果と心象について考える。主体の心情を表す言葉ではあるが、賢治は描こうとする対象に使っている例が多い。賢治はそれによつて、どのような表現効果を得ているであろうか。〈かなしみ〉、〈さびしさ〉を、1書き手の感情の形容、2対象の形容、3名詞形での表現に分けて、それぞれ考察したい。

注

- (1) 白秋からの影響については、恩田逸夫「宮沢賢治における白秋の投影」(『四次元』81、一九五七年)をはじめとして多くの論考に、その色彩感覚や宗教的美意識、擬音語や表記などの表現に現れることが、言及されてきた。朔太郎については、賢治の盛岡中学校同級生の阿部孝「或日の賢治」(『甘口辛口』同學社、一九五六年)に、賢治は「月に吠える」に触発されたように〈心象スケッチ〉を成立させたことと記される。(境忠一「宮沢賢治への近代詩への投影」(『宮沢賢治全集別巻 宮沢賢治研究』筑摩書房、一九六九年)。
- (2) 福島章「宮沢賢治 芸術と病理」(金剛出版、一九七〇年)に賢治の性格を周期性性格と捉え、抑鬱状態における行動や表現について言及している。
- 矢幡洋【賢治】の心理学 献身という病理(彩流社、一九九七年)に、賢治の関係嗜癖による、自己過大評価と過少評価の間で生じる葛藤と行動の関係について指摘する。
- (3) 『日本語の語源』(講談社現代新書、一九七八年)。
- (4) 『日本語の年輪』(有紀書房、一九六三年)。
- (5) 『石上私淑言』巻二(二七六三年(宝曆十三)。テキストは『本居宣長全集第二巻』(筑摩書房、一九六八年)による)。

見る物きく事なすわざにふれて。情の深く感ずることをいふ也……人の情のさま／＼に感く中に。おかしき事、うれしき事などには感く事浅し、かなしき事こひしき事などは感くこと深し。故にその深く感ずるかたを。とりわきてあはれといふ事ある也。俗に悲哀をのみあはれといふも、その心ばへ也。(106頁)

(6) 「涕泣史談」(『定本柳田國男集 第七巻』筑摩書房、一九六八年。初出「国民学術協会講座」一九四一年)。

(7) 竹内整一「『かなしみ』の哲学」(NHKブックス1147、二〇〇九年)。

(8) 『石上私淑言』巻一(二七六三年(宝曆十三)。テキストは『本居宣長全集 第二巻』(筑摩書房、一九六八年)による)。

今人せちに物のかなしき事有て。堪へがたからんに。そのかなしきすぢをつぶ／＼といひつづけても。猶たへがたさのやむべくもあらず。又ひたふるに。かなし／＼とたゞの詞にいひ出ても。猶かなしさの忍びがたくたへがたきとさは。おぼえしらず。聲をさ／＼げてあらかなしやなふ／＼と長くよば／＼りて。むねにせまるかなしさをはらす。其時の詞は。をのづからほどよく文ありてその聲長くうたふに似たる事ある也。これすなはち歌のかたちなり。……(110頁)

其事をひとり言につぶ／＼といひつづけても。心のはれぬ物なれば。それを人に語り聞すれば。や／＼心のはるゝ物也。さてそのきく人もげにとおもひて。あはれがれば。いよ／＼こなたの心ははるゝ物也。さればすべて心にふかく感ずる事は。人にいひきかせではやみがたき物なり。(112頁)